慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	G. Lefebvre, Les Thermidoriens, 1937
Sub Title	
Author	鈴木, 泰平(Suzuki, Taihei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.2 (1941. 11) ,p.147(333)- 148(334)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19411100-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が成立し、生長するといふことは、斷じて考ふべからざることである」

而してその肇國の精神を顯現するためには、それが果して如何なるものであるかを理解し體得することが緊要であり急務である。

「しかも、今なほその信念の確立をなす能はざるにあらざるかを、思はしむるものある實情に接して、遂に默すること能はず、こゝに予が一片の衷情を披瀝して、江湖に訴へんと欲するのである。

著者の憂國の至情まことに切なるものがある。

さて次に著者は、神代の事柄は書紀よりも古事記による方が正當である所以を明にし、次のやうに述べられる。

古事記の神話に現はれてゐる思想は、天地萬物といふものは天之御中主神の御德である產巢日の神の靈力によつて生成する（成る、生む、生るの三形式が認められる）ものであるといふ考へが基礎をなしてゐるやうに思はれるのであるが、そこに、すべてのものに家族的聯系を發生せしめる思想の根原が存するのであり、その神聖靈妙なる力を、物神一如の信念の下に、萬神萬物同族觀念の源泉としてみてゐる譯であり、それはやがて八紘一宇なる日本精神の根原をなすものである。鵜葺草葺不合命の御子稻氷命は海原へ、御毛沼命は常世の國へ渡られたといふところにも所謂八紘一宇の精神といふものが現はれてゐると認むべきであり、要するに神話そのものが、斯る精神を以て作られたものであると解釋すべきであらうと思ふ。

さて八紘一宇なる語が淮南子や列子に散見するところから、これを元來の日本人の考へとみることに疑を挿むものもあるのであるが、その意義思想は彼我全く異るものがあるのであつて、前述の神話に現はれてゐるあの考へ方を有する民族に非ずしては到底生み出し得べき思想ではないと考へられる。

兎に角、神武天皇肇國の大方針として、世界といふものは一家族たるべきものであるとの御考へを御示しになつたといふことは、偉大なる事實であり、しかもそれは人類一元の理論にも合致するところである。この大方針この理論を實現することを以て、我々の理想とするといふことは、日本民族の精神を最もよく顯現するものであると認むべきであらうと思ふ。

本書は二百頁足らずの小册子ではあるが、著者の所期の目的は十分達成されてゐると思ふ。一讀をお薦めする次第である。

（淺子勝二郎）

G. Lefebvre, Les Thermidoriens 1937.

著者ルフェーヴル教授はソルボンヌ大學フランス革命史講座擔任者として、亦 Les paysans du Nord pendant la Révolution Française の著者として令名高き人。近時農民並に農業に關する卓越せる論文を發表され、A. Mathiez 教授亡き後革命史研究に指導的役割を果されてゐる。本書はロベスピエール政府倒壞後所謂テルミドール派（溫和派）の支配する時代（一七九四年七月より一七九五年十月）に關するユニークなる研究である。先づ第一

章に於いて革命政府の高度の政治經濟の統制政策に對する全面的反動を論じ、第二章乃至第五章に於いてテロ政治の實權者公安委員會の改組を始め革命裁判所の廢止等革命的制度の解體ジヤコバンに對する徹底的抑壓並にテルミドール派の政權掌握の過程を述べ第六章及び第七章に於いて激烈に進行するインフレ防止策として物資最高價格令の撤廢並に其の他の政策を論じ、結局その對策は反對の效果を擧げ、物價は高騰し、アッシニアは暴落し、都市の生活必需品は絶無の狀態と爲り、徵發を强行された農民の猛烈なる反對を惹起し、結局商人に依る外國貿易の自由なる取引——軍需品確保のため——を來し自由經濟への復歸を來たす經路を述べ、以つて資本を有するブルジョアの擡頭を論じ、第八章乃至第十章に於いて歐洲諸國の對佛聯合の崩壞の事情並に Quiberon 上陸を企圖した英軍並に Vendée の叛亂軍に對する Hoche 軍の勝利は混亂狀態にあるフランスの Solidalité（連帶性）を再建したと述べ、第九章に於いて所謂九五年憲法の特質——有限選擧、義務宣言——並にテルミドール派の政權繼續策に對する各黨派の動向を探り、更に十月に於ける對外戰爭の失敗は內政、經濟の失敗と共に內治外交の不徹底を明にしたものであり、內外の危機を未解決のまゝ次の Directoire 政府に讓つたと述べ、結論として、一、確固たる指導理念の缺如並に指導者の皆無、二、革命的政策の緩和としての經濟の自由、並に都市に於けるインフレに依る新ブルジョア（投機業者、軍隊御用商人、軍需工場主）の擡頭並に近代的キャピタリズム發生期に於ける彼等の役割、三、インフレに依る債權者、土地所有者の衰退、農民のアッシニア支拂ひに依る

都市消費者への勝利等を擧げ、テルミドール反動の社會的反動はブルジョアの社會的地位の優越に依り明白であるとしてゐる。最後に外國の對佛攻勢は內政上の矛盾を革命的獨裁より軍事的獨裁への轉化に依り處理せられるとなし、ナポレオンの出現の基礎的地盤を明かにしてゐる。全章を通じ鋭い分析が社會、經濟の部面に行はれ、其の豐かな歷史的視野と相俟ち、本書をして此の分野のみならず、革命史全汎に於いて優れた文獻となしてゐる。革命史、ナポレオン時代史に對し、著者の示した見解は多くの研究者をして反省せしめるに足るものである。亦類書の少い此の分野は著者に依り始めて學的體系を與へられたとも言ひ得よう。かゝる意味に於いても本書の持つ學的價値は絶大である。

(Paris. 1937. Armand Colin 叢書 No. 196. 鈴木泰平)